

## 広島へ行って感じたこと

五泉北中学校 3年 伊藤 暖人

今回、広島の式典に参加させていただき感じたことが沢山ありました。

今から78年前の1945年8月6日、午前8時15分、広島に一発の原子爆弾が投下された。想像もつかない程の熱線と爆風により数多くの尊い命が奪われた。そして、街並みも一変した。まるで地獄絵図の様になり見えた景色は黒一色の世界。原子爆弾には、放射線が含まれており被爆者となってしまった人達は、体はもちろん、心にも大きな苦しみや悲しみを今も持ちながら生活されています。

平和記念資料館では、亡くなった人達の遺品や残された言葉がありました。一步一步歩くたびに立ち止まってしまい、気持ちを受け止めることが辛かったです。展示品として並んでいる遺品はどれもボロボロでしたが、その中にあった一通の手紙が目にとまりました。それは被爆後、最後の力を振り絞り娘さんに宛てた手紙でした。「元気でみんなから愛される子に育ててください。さようなら。」これを読んだ時、胸が苦しくなりました。

また、女性の被爆者である梶本さんより直接お話をお聞きしました。当時、梶本さんは中学生で工場で働いていました。いつも通り仕事をしていたら、突然、青空に眩しい光が放たれたと同時に建物が一瞬で崩壊してしまいました。それでも、自分の体を触り「生きている」と確認したようです。しかし、体が動くのは頭と両腕だけ。自分の足が、がれきの中にあっただけで思いっきり引っ張りました。足の出血が凄かったけれど、その場から出れたのが嬉しかったと言っていました。自分と同様に、周りの人達も血だらけでした。中には全身皮膚が真っ赤に剥がれた人もいて、「水、水をちょうだい」と来る人来る人が言っていました。時には、お化けみたいに全身が燃えている人もいました。その姿を梶本さんは見て、水をあげたかったけれど燃えている人に水をあげると死んでしまうと女学校で習っていたのを思い出して、心の中で詫言っていたそうです。でも、隣にいた友達は「水をあげなと死んじゃうよ」と水を飲ませました。嬉しそうに飲んだけれど「ありがとう」と言ってそのまま亡くなりました。心の葛藤と何度も戦いながら次々と死んでゆく姿に友達を助けられなかった自分を責めましたが、少しでもできる行動を続けたそうです。今でも梶本さんは当時の思いを変わらず持ち続けていました。

そして梶本さんからは、「死ぬ選択を絶対に選ばないでほしい。頂いた命は大切にしてください。この先、まだ人生は長いです。どんな結果が待っていても死ぬことは考えてはなりません。」という願いを込めたお言葉をもらいました。

最後に、また日本のどこかに原爆が投下されたら……。そして、自分が被爆したら。そう思うと決して原爆は他人事でもないし、過去の話でもありません。今も、ウクライナとロシアが戦争をしている。関係のない人達が巻き込まれ命を落としている。原爆もたった一発で多くの命が奪われた。原爆が投下され78年が過ぎた今、体験談を話せる人も少なくなっていることでしょう。私は今回、核兵器の恐ろしさと被爆者の苦しみを少しではありますが知ることができました。命の大切さを再確認しました。核兵器が二度と使用されることのないよう心から願います。自分の中学校はもちろん、他校のメンバーと一緒に時間を過ごせたことは、貴重な時間でした。ありがとうございました。